

た。此仲介をした講釋師の石川一口の法善寺の席で、扇歌が三味線を弾いて綱太夫が端唄を歌ふといふやうなことを遣つた。もちろん大喝采だつたといふことだが。

四 馬方彌太夫（四代目）

端場専門の豪音家

阿波の小松嶋から出て、大阪南堀江橋通高臺橋筋東に住む。始め淡路座で修業をして、大阪で長門の門に入つた。二段目物、端場語りの名人で、此人の次に語る切場の太夫は恐れを爲したといふ。千本櫻の椎の木が十八番で、簾内で語つてゐるのであるが、それでも、その次へ現はれる、すし屋の長門を喰つてしまつたといふ逸話がのこつてゐる、長門ほどの名人でさへこの通りだつた。

この椎の木を語つた時、ちよつと待ち合はせの間に、傍らの人に彌太夫は「私の聲はなんと聞こえるか」と問うて見た、すると其人は「牛のやうです」と即座に答へた。よつほど根強い唸り聲だつたと見える。

阿波の國に居た頃は馬方だつたといふ説がある。本人はさうとは云つてはゐなかつたが、世

間では——馬方彌太夫——で通つてゐた。

大丈夫切場を語る腕前があるのに、わざと好んで端場を語つたのは、役場の善し悪しよりも己れの藝格といふものをちゃんと心得てゐたのに違ひない、歌舞伎の尾上松助といふところ。

後に五代目彌太夫も好んで越路や其他の端場を勤めたのも、一つは師匠四代目に私淑したのもかも知れない。

名人長門は時に氏太夫の道明寺に東天紅の端場を語つたり、又長門が寺子屋だと氏太夫が寺入りを勤めたりするやうなことは、其昔は随分遣つたものらしい。舞臺効果を揚げる爲めには、少しのこだはりもなく相談づくでやつたものだ、開けたものである。

彌太夫は文化十一年生、明治元年三月十九日、五十五歳で死歿。

五 洒脱春太夫（五代目）

湯屋の三助もした

文化五年、堺の鍛冶屋町に生れ、明治十年七月二十五日、七十歳で死んだ。煙草庵丁鍛冶の子。若い時は角力が好きで、素人角力の大關にまでなつたことがある。